

公衆衛生医師となって 自分の時間軸をたどる



大阪府茨木保健所地域保健課
鹿島 レナ

1993年大分県生まれ。海と山を眺めることと温泉が大好き。2018年大分大学医学部医学科卒業。大分県で2年間の初期臨床研修を経て、2020年に大阪府に入庁し、現在に至る。社会医学系専攻医2年目(掲載時点)。

研修医時代から毎月拝読していた本誌の中で、特にお気に入りなのがこのシリーズです。公衆衛生医師の仕事を月に一度、より現実的に想像する機会でもありました。拙い文章ですが、私も先輩の先生方同様、このページをふとご覧になった若手の方にほんの少しでも勇気を届けたいことができたら幸いです。

大阪府に入庁するまで

私は生まれも育ちも大分県です。医師を志すようになったのは田舎に暮らす祖父と祖母の存在が大きかったように思います。祖母は私が物心つく前に脳梗塞になり、祖父は祖母を20年以上老老介護していました。祖父のたゆまぬ努力は尊敬に値するものでした。また、医療やリハビリ、介護を通して地域の方々にたくさん支えられて晩年を過ごした祖母を見て、患者と一対一で向き合うことよりも、地域を支えるシステム作りを行うことに魅力を感じるようになりました。

つもりです。

公衆衛生医師になってから

大阪府に入庁し、茨木保健所地域保健課に配属されました。1年目は新型コロナウイルス感染症対応を主に行っていました。当時は保健所で濃厚接触者の鼻咽頭拭いを行ったり、自宅療養者で状態の悪そうな患者さんのお宅に様子を見に行ったりしていました。保健師と一緒に積極的疫学調査や陽性者の健康観察を行ったり、年度の途中からは大阪府入院フォローアップセンター(以下、「FC」という)で入院先の調整も行っていました。

2年目の今年度は母子・難病チームや精神保健チーム、感染症チームの各会議に参加し、引き続き、新型コロナウイルス感染症対応も行っています。1年目から社会医学系専門医の研修を開始していましたが、今年度からは副分野の研修も開始しており、産業・環境分野や医療分野の研修も行っています。昨年度に比べると、地域保健課の業務にも幅広く関わるようになりましたし、社会医学系専攻医

た。

医学生になってからしばらくは、私がやりたいことがどういう分野に分類されるのかがよく分からないうでした。大学5年生になり、行政医師という職種があるということを知りました。厚生労働省での医療政策セミナーに参加し、グループワークで医師の需要と供給のバランスを取るための政策を考えました。同じような学年の学生や研修医の先生たちと一緒にアイデアを出し合った結果、私たちのグループの提案した政策が審査員の先生方に評価をして頂けたことで、「こういうことをするのはなんと

としてもフィールドを広げて学びを深めることができます。ここでは新型コロナウイルス感染症対応で、特に印象に残っている業務を二つ挙げてみようと思います。**【管内病院でのクラスター対応について】**

約1か月半にわたって、患者・医療スタッフで合計80名程度の陽性者が出ました。感染対策の面では当該医療機関と毎日連絡を取り、保健所として助言を行いました。管内の新型コロナウイルス感染症患者受け入れ病院のICD(Infection Control Doctor)、ICN(Infection Control Nurse)と一緒にラウンドしたり、北摂四医師会感染対策ネットワークによるラウンドを調整し、専門家からの助言を行ってもらいました。重症化する患者も多く、適宜FCに転院調整を依頼しました。管内の新型コロナウイルス感染症患者受け入れ病院から助言を得て、当該医療機関でも治療を行ってもらいました。病院として公表する内容について保健所で確認し、適切なリスクコミュニケーションに努めました。非常に多くの方々のお力を借りな

だか楽しいかもしれない」と思うことができました。大分県の公衆衛生医師の先生にお願いして県庁や保健所の見学もさせて頂き、学生を終える頃には社会医学を目指そうという気持ちに傾いていました。

その後研修医になり、臨床医は続けられないかもしれないけど(実際はだいぶ迷っていましたが)、「臨床の現場の中からたくさん課題を見てみよう」というのが当時の私のマインドでした。医学生の時と異なっていたのは、病氣のことだけではなく、さまざまな社会的背景を持った人たちと向き合わなければいけないということでした。そんな中で、湧いてきた思いを幾つか挙げると、予防医療や健康づくりにおけるポピュレーションアプローチをしてみたい、自殺予防や未遂者に対する社会的資源をうまく活用した支援の枠組みについて考えてみたい、妊娠・出産につ

がら収束に向けて邁進する日々でした。

また、収束後にはなりましたが、保健所内の環境衛生課職員と一緒に空調図面や換気の実態について検討を行いました。保健所内でも多職種連携を行うことで、感染対策について多角的に評価できることを実感した貴重な経験でした。**【大阪府入院FCでの業務について】**

大阪府入院FCは新型コロナウイルスに感染し、医療機関への入院が必要な府民の入院先医療機関を調整する組織です。急激な感染者数増加に伴い、大阪府全域の医療機関を効率的かつ包括的に活用することを目的として令和2年3月に設立されました。ここでは、重症化した患者や状態の落ち着いた患者の転院調整、ホテル療養患者のオンライン健康相談、民間救急の手配も行っています。私自身は第3波の頃から併任しています。病床利用率が高い時期や、単に呼吸不全だけではなく心血管疾患や精神疾患、外傷などを合併した患者、妊婦や小児の陽性者の調整が特に難しいと感じています。急を

いて正しい知識が普及して穏やかな気持ちで子どもを迎える家族が増えてほしい、ACP(Advance Care Planning)の概念が浸透し、救急医療の場面等で不本意な医療が行われることを防ぎたい、アレルギー情報が学校や医療機関に適切に共有されるようになってほしい、抗菌薬適正使用について広く知られるようになってほしいなどといったことです。2年間と短い臨床経験でしたが、たくさん課題を見つけられたことは大きな財産になったと思います。

公衆衛生医師サマーセミナーへの参加や大阪府庁と保健所の見学を通して意志を固め、初期研修医終了後すぐに入庁しました。生まれてこの方大分県を出たことなかった私が、大阪府に入庁することに決めたのは結婚がきっかけです。人生何が起るかわかりませんが、何とか順応してやっています。

要しますし、二次医療圏を超えて調整しなければなりません。FCの先生方の指示を仰ぎながら、受け入れ医療機関の力をたくさんお借りして、ここまで総力戦で幾つもの波を乗り越えてきたと思っています。

最後に

公衆衛生のことも大阪府のことでも何も分からない私に、これまでご指導くださったすべての方に感謝申し上げます。まだまだ未熟者ですが、これからも精進してまいります。

多くの関係機関と協働し、地域住民がより健康に、より幸福に暮らしていけるような社会を創造することを目指すこの仕事は、地域社会にとつて非常に大きな役割を担っているはずだと思います。社会医学系医師や公衆衛生医師の日本社会における重要性がさらに多くの人々に認められ、私たちのアイデンティティが確立されること、そして私たちと一緒に楽しく働く仲間たちがさらに増え、日本の公衆衛生界の未来が希望に満ちあふれることを切に願います。